

「さようなら」という覚悟

先日、かわさき市民アカデミー第27回の開講式が行われました。

その開校式の記念講演で、かわさき市民アカデミー 副学長 竹内整一先生の話聞く機会がありました。「日本人はなぜ『さようなら』と別れるのか」という興味深い話でした。

「さようなら」は「さようであるならば」という、先行の事柄を受けて、後続の事柄が起こることを示す接続詞からできている、世界でも珍しい別れの言葉だといえます。

竹内先生が引用した荒木博之氏の「やまとことばの人類学」の文章が心に残ります。

「日本人が別れに際して常に一貫して『そうであるならば』の意のいい方を使ってきたのは、日本人がいかにか古い『こと』から新しい『こと』に移っていく場合に、必ず一旦立ち止まり、古い『こと』に決別しながら、新しい『こと』に立ち向かう強い傾向を保持してきたかの証拠である。」

私は、この文章を読んで「さようなら」という時は、「覚悟」が必要なんだと思いました。

今まで、そこに生きていたことを確認し、その場所に決別し、新しい道に進んでいく。

そういう覚悟を持って、人は「さようなら」と別れていくのだと思いました。

3月、4月は別れと出会いの季節です。

去ることの寂しさと新しいことに会える期待が入り混じる季節です。

でも、「さようなら」はどうにもならない必然です。逆らえないものです。

そうであるならば……。過去に決別し、新しい未来を創るために、

私も、3月まで一緒に仕事をしていただいた方々に、覚悟を決めて、

きちんとお別れの言葉を言わなければなりません。

「さようなら」

(M・Y)